

公益財団法人セディア財団主催

第5回 高校生が描く

明日の農業コンテスト

明日の農業を考えよう！

受賞作品集

全国の農業高校生から

547作品が集まりました！

未来の農業への
夢と学びが詰まった
レポートを
ぜひご覧ください！



これまで、そしてこれからも。
セディアグループは持続可能な未来への取り組みを進めます。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



人と、地域と、社会と、自然との共生を第一に、しあわせを明日へつなぐ取り組みを、セディアグループの水と住まいと農業の事業領域を中心に行っています。

目次

02. 主催者からのあいさつ
03. セディア財団賞（最優秀賞・金賞）受賞者のご紹介
04. コンテスト要項・経過報告
05. 結果発表
06. セディア財団賞 受賞作品
07. 最優秀賞 徳永 都士
「日本の少量多品目小規模農家の未来像～高校生農家の物語『裏の畑から世界へ』～」
09. 金賞 田中 駿也
「小さい頃からの大きな夢」
11. 金賞 外崎 裕樹
「農業から始まる地域創生～農業の力で厚沢部町を元気に!～」
13. 金賞 園田 竜希
「広がれ6次産業化 農業のイメージを変える第一歩」
15. セディア財団賞受賞者の声
17. 応募高校一覧

主催者からのあいさつ

「高校生が描く『明日の農業コンテスト』」は、当財団が2017年に始めました。私たちが暮らしていく中で欠かすことのできない「農業」が、どうすれば持続可能で発展的な産業になるのか、これからの農業を担う高校生の皆さんに考えてもらう機会をつくり、農業の未来にもっと夢を描いてもらいたいとの想いからスタートしました。

第5回となる今回は明るい未来を想像し、「わたしはこんな方法で農業を元気にする」というテーマで農業高校のみなさんにアイデアを募ったところ、コロナ禍にも拘らず547点もの作品が集まりました。素晴らしい作品をご応募いただいた高校生の皆さんと、ご指導いただいた先生方に改めて心より御礼申し上げます。

どの作品も、農業高校生の皆さんの日々の学びの中での発見や、若い方々ならではの新しいアイデアが詰まっていて、未来を真剣に考えているのは若い人の方だということを改めて実感すると共に、心強く感じました。本作品集には、厳正なる審査で選ばれた、セディア財団賞（最優秀賞・金賞）の4点を掲載しています。これから日本の農業を牽引していくであろう高校生の皆さんが、この取り組みをきっかけに農業の未来へ大きな夢を描き、その夢を実現することで、日本の農業の持続的な発展につながることを切に願います。

最後になりましたが、審査委員長をお願いいたしました東京都立園芸高等学校校長 並川直人先生をはじめ、審査委員の皆さま、本コンテストにご理解とご協力を賜りました関係者の皆さまに、厚く御礼申し上げます。

令和3年10月吉日
公益財団法人 セディア財団
理事長 渡邊 元

セディア財団賞(最優秀賞・金賞)受賞者のご紹介

第5回 高校生が描く「明日の農業コンテスト」応募作品547点の中から選ばれた、セディア財団賞(最優秀賞)の受賞者1名と、セディア財団賞(金賞)の受賞者3名には、賞状とトロフィーを送付いたしました。

セディア財団賞 最優秀賞



愛媛県立西条農業高等学校 3年

サトシ
徳永 都士

「日本の少量多品目小規模農家の未来像
～高校生農家の物語『裏の畑から世界へ』～」



〈受賞コメント〉

最優秀賞という、想像を超える大きな賞をいただき、ありがとうございます。私は自宅の畑で作物を作っていて販売もしています。私の経験をベースに、小規模農家でも世界を相手にした農業ができるという思いをまとめました。文章作成は苦手なので先生には本当にお世話になりました。感謝しています。

セディア財団賞 金賞



富山県立南砺福野高等学校 2年

田中 駿也

「小さい頃からの大きな夢」

〈受賞コメント〉

祖父の代からバラを栽培しています。私もこの仕事を継ぎたいと思いましたが、父から現実的な課題も教えてもらい農業高校への進学を決意。レポートは課題を克服していくかにビジネスしていくかをまとめました。その点が評価されたとしたら嬉しくもあり、心強く感じます。ありがとうございます。



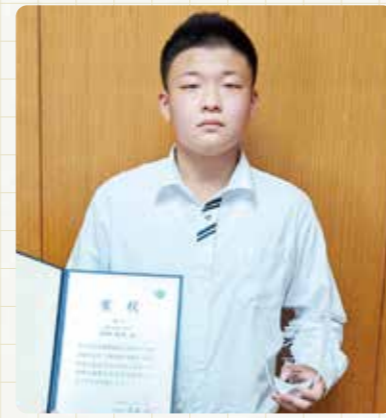
北海道大野農業高等学校 3年

外崎 裕樹

「農業から始まる地域創生
～農業の力で厚沢部町を元気に!～」

〈受賞コメント〉

今回は金賞という栄えある賞をいただき、本当にありがとうございます。私は兄と農業の共同経営をめざしています。そして農業で新たな地域創生を叶えたい。レポートではその想いをまとめました。なによりこの受賞はこれからの大きな励みになります。一步一步夢を実現していきたいと思っています。



大阪府立園芸高等学校 2年

ライキ
園田 竜希

「広がれ6次産業化
農業のイメージを変える第一歩」

〈受賞コメント〉

金賞をいただき、ありがとうございます。入学して初めて規格外農作物の多さに驚き、それを利用したプロジェクトを推進していると知って興味が湧きました。その現状と将来の夢を描いたのが今回のレポート。将来は6次産業を視野にいれたビジネスを考えています。この受賞で大きな手応えを得ました。

〈コンテスト要項〉

私たちの暮らしに欠かすことのできない「農業」は、どうすれば持続可能で発展的な産業になるのか。農業高校に通う生徒の皆さんの、日々の学びの中から「自分ならこうする!」と考えた農業に関するあらゆるアイデアをまとめたレポートを提出していただきました。

応募対象

全国の農業高校に通う1・2年生

募集期間

2021年1月5日(月)～2021年4月16日(金) [当日消印有効]

募集内容

「わたしはこんな方法で農業を元気にする」をテーマにしたレポート。原稿用紙8枚以内(2,000～3,000字程度)。パソコン・ワープロからの印刷可。日本語で執筆された自作の未発表作品に限りです。

- (レポートテーマ例) ① 収量を増やす為には
② 多品種化でリスクを減らす
③ 新たな出荷調整方法
④ 生産性の向上と施設園芸の活用
⑤ これからの販路開拓に向けたアイデア
⑥ IoTを駆使した次世代農業に向けたアイデア など。

※レポートの中で、他の著作物を引用する場合は、その箇所を明記するとともに、レポートの最後に出所を記載してください。

その他提出物

本文と別にエントリーシート(レポート内容をまとめたA4サイズのシート1枚)を提出。レポート内容のほか、応募者氏名などエントリーシート項目に沿ってご記入ください。また、学校で複数人応募の場合は学校応募用紙も提出してください。

※エントリーシートは、当財団HP内にてダウンロードしたファイルにご記入ください。

入賞発表

2021年7月初旬発表

〈経過報告〉

作品募集

2021年1月上旬より、全国の農業高校にご案内のチラシなどを送付し作品募集を開始しました。

締め切り

4月16日(金)の応募締め切り日までに、全国の高校生から547点(30校)もの力作が集まりました。

一次審査会

開催日:5月26日(水) 場所:オンライン開催
応募作品を慎重にしばり込み、最終審査会へのノミネート作品24点を選出しました。なお、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オンラインにて審査を実施しました。

審査

「事前審査」、「一次審査」、「最終審査」を予定。審査ポイントは、①提案の具体性 ②提案の実現性 ③提案の独創性 (提出日現在で実在例のあるレポートは対象外)

※審査結果や受賞にいたらなかった理由等に関するお問い合わせは、一切お答えいたしかねます。

表彰内容

セディア財団賞(最優秀賞・金賞)
副賞:奨学金20万円※1 … 4名※2
銀賞 副賞:図書券(3万円) … 5名
銅賞 副賞:図書券(1万円) … 10名

※1 新型コロナウイルス感染拡大状況によって副賞内容が変更になりました。
※2 応募総数に応じ、受賞者数が増減する場合がございます。

応募先

高校生が描く 明日の農業コンテスト事務局(セディア財団内)
〒104-0045 東京都中央区築地5丁目6番10号
浜離宮パークサイドプレイス6階

※土・日・祝日を除く月～金 10:00～17:00

応募作品の著作権はセディア財団に帰属します。作品は返却いたしません。

留意事項

特許・実用新案権、企業秘密やノウハウなどの情報の法的保護については、応募者の責任において対策を講じた上で、一般に公表しても差し支えない内容としてください。

最終審査会

開催日:6月24日(木) 場所:オンライン開催
一次審査で絞り込まれた作品24点を厳正に審査。一次審査と同様にオンラインにて審査を実施し、下記の賞を決定しました。

※受賞者・受賞作品は5ページ参照

賞

セディア財団賞 … 4名(内、最優秀賞1名)
銀賞 … 5名
銅賞 … 10名
学校奨励賞 2校

〈結果発表〉

セディア財団賞〈最優秀賞〉

愛媛県立西条農業高等学校 3年

徳永 都士^{サトシ}

「日本の少量多品目小規模農家の未来像 ～高校生農家の物語『裏の畑から世界へ』～」

セディア財団賞〈金賞〉

富山県立南砺福野高等学校 2年

田中 駿也

「小さい頃からの大きな夢」

北海道大野農業高等学校 3年

外崎 裕樹

「農業から始まる地域創生
～農業の力で厚沢部町を元気に!～」

大阪府立園芸高等学校 2年

園田 竜希^{ライキ}

「広がれ6次産業化
農業イメージを変える第一歩」

セディア財団賞〈銀賞〉

愛知県立安城農林高等学校 3年

岡本 健伸

「ICT機器の活用で広がる
『新しい有機栽培』の可能性」

北海道倶知安農業高等学校 2年

気田 智春

「稲作専業『気田ファーム』を目指して」

佐賀県立伊万里実業高等学校 3年

中島 悠月

「文化をつなぐ地域PR作戦」

福島県立福島明成高等学校 3年

本田 実紀

「私が福島のためにできること
～イノシシの可能性を求めて～」

広島県立油木高等学校 3年

田島 瑞季

「信頼される農業生産者を目指して」

セディア財団賞〈銅賞〉

群馬県立勢多農林高等学校 3年

川田 杏樹

「認証取得で農業は明るくできる」

岩手県立盛岡農業高等学校 3年

嶋野 いおり

「未来の農業後継者を増やすために」

岩手県立盛岡農業高等学校 2年

立花 姫星々

「世代を繋ぐ農業の魅力」

愛媛県立西条農業高等学校 2年

加藤 瑚由

「近未来農業スタイル
～ライブ配信ネットワークの構築を目指して～」

岩手県立盛岡農業高等学校 3年

東 琉月

「農家が楽しそうに笑顔なら
農家は増える」

新潟県立加茂農林高等学校 3年

高木 悠成

「持続可能な農業を」

新潟県立加茂農林高等学校 3年

服部 来希

「有機農業の普及に向けて」

群馬県立勢多農林高等学校 2年

阿部 瑞紀

「農業を会社みたいにできたら」

岩手県立盛岡農業高等学校 3年

今川 正悟

「これからの農産物の
販売方法について」

学校奨励賞

愛媛県立西条農業高等学校

新潟県立加茂農林高等学校

セディア財団賞 受賞作品

第5回 高校生が描く「明日の農業コンテスト」応募作品547点の中から選ばれた、セディア財団賞（最優秀賞・金賞）の受賞者の作品を紹介します。

セディア財団賞

最優秀賞

愛媛県立西条農業高等学校 3年

徳永 都士

「日本の少量多品目小規模農家の未来像
～高校生農家の物語『裏の畑から世界へ』～」

金賞

富山県立南砺福野高等学校 2年

田中 駿也

「小さい頃からの大きな夢」

北海道大野農業高等学校 3年

外崎 裕樹

「農業から始まる地域創生
～農業の力で厚沢部町を元気に!～」

大阪府立園芸高等学校 2年

園田 竜希

「広がれ6次産業化 農業のイメージを変える第一歩」

セディア財団賞受賞者の声

レポートが生まれた背景とこれからの夢について伺いました

日本の少量多品目小規模農家の未来像

～高校生農家の物語「裏の畑から世界へ」～

愛媛県立西条農業高等学校 食農科学科 3年 ^{サトシ} 徳永 都士

「家庭菜園」が趣味の私が、地元の西条農業高校に入学し、2年。小学4年、母からの何気ない一言から裏の畑で家庭菜園をはじめ、現在まで40種類以上の野菜や果樹を栽培し、多くの品目の栽培育苗技術を習得し、先進農業機械を導入したスマート農業も実践してきました。去年は地元農家カフェや農産物イベントでの販売活動も始めました。現在は、近くの子どもたちに農業塾を開催、野菜を栽培し、できたものを販売、食農教育に留まらず、収支決算や経営理論の基礎となる農業経営教育プログラムを計画中です。YouTubeでの動画配信も含め、私は「高校生農家」を謳い、さまざまな活動をしてきました。

令和2年には、「畑大好き自己流8年」。この見出しで、日本農業新聞で紹介されたことを皮切りに、毎日新聞主催の毎日農業記録賞2020では、松山支局長賞を受賞し、毎日新聞に掲載されました。令和3年の愛媛県農業協同組合中央会、愛媛新聞社主催の「甦れ!農パート22」では、愛媛新聞で紹介していただきました。普段から道を歩けば、近所の農家さんに「サトシ、新聞見たぞー!」「次の動画はまだかー!」地元ではちょっとした有名人です。私が情報発信に力を注ぐのには理由があります。それは農業で地域を元気にしたいのです!

四国一の農業都市として名を馳せる我が西条市ですが、課題であった少子高齢化や耕作放棄地の増加に加え、農家の経営圧迫や廃業も耳に入るようになりました。昨今の新型コロナウイルス感染拡大による農家への悪影響は明確であると言えます。農業が見直され、食の重要性や健康の重要性が問われるようになりましたが、だからと言って、私一人ですべてできることは多くありません。地域の将来を担う私たち若者ができることは無いか?と自分のできることを考えた結果、私が人に誇れるものが、農業への気持ち、熱意であったことに気づきました。

緊急事態宣言の自宅待機による学校休校が、あらためて農業のすばらしさや自然と触れ合うことの尊さ、農業の重要性を考える機会となり、今までよりも農業が好きになりました。このことをきっかけに、趣味の家庭菜園にとどまらず、農業後継者として、本気で農業を考えるようになったのです!

私の所属する食農科学科野菜班では、非結球レタスのサラダナ、ホウレンソウやミズナ、メロンで愛媛県GAP(Good Agricultural Practices:農業生産工程管理)を取得し、出荷、販売を行っています。中でもサラダナは「うまいぞ菜」として商標を登録。西農ブランドを代表する野菜となっています。継続申請の今年、私たち野菜班が申請書類についても学習し、作成を行っている日々です。生産工程を考えながら、自分の家の畑や設備と比べます。実はここで学んだ知識を生かし、自分の畑でのGAP認証取得を目指しています!味はもちろん、安全と認められた野菜を販売できるのです。現在は、松山空港発着の台湾との直通便を活用し、西条市が力を入れている農産物の輸出を準備中です。早ければ、今年の夏には、私の野菜が海外で販売されるかもしれません。

昔から西条市は、道前平野、西条平野や周桑平野の広大な平地を利用し、「うちぬき」と言われる豊富な自噴水を生かした、米どころとして発展してきました。ここ近年は、米の裏作としての七草の栽培増加や、水の活用からトマトやナス、イチゴなどの果菜類の生産量も増加しています。我が家は、父と祖母の行う稲作兼業農家で、専業農業としての経営ベースに耐えうるほどの規模はありません。西条市の農業経営母体の多くも同じ状況です。しかし現在、西条市を含めた愛媛県の東予地方には、JA運営の直販所「さいさいきて屋」「周ちゃん広場」など日本有数の販売売上を誇る直販所を活用し、小規模多品目でも1,000万円規模の収入を得ている農家が多数あります。つまり、小規模多品目の農

業経営形態でも販売方法次第で十分経営維持が可能なのです。私の目指す農家の未来像は、小規模多品目の昔ながらの農家の姿。しかしながら現代のSNSや情報技術を駆使し、グローバル化、食の多様化、日本食・日本文化の人気に伴い、販路を海外に目を向け、栽培した農産物は、安全認証をクリアし、販路エリアを固定せず、海外へ輸出展開していくのです!日本の農家の弱みとなっている販路確保や流通の分野を伸びしろと捉え、西条市の未来の農業経営形態のモデルケースとなるでしょう!

実際、本校食農科学科果樹班では、パパイヤを露地栽培し、未熟果を販売しています。東南アジア圏では当たり前に見られる野菜として食べられる青いパパイヤ。沖縄料理店だけでなく、増加している外国人労働者や長期滞在型インバウンドをターゲットに販路を開拓しています。様々な日本製品同様、安全安心な日本の農作物は、外国の人たちにも認知されているのです。昨年販売した青果の90%以上は、在日外国人に対してだったそうです。コロナ禍での出入国渡航ができず、ふるさとの味であるパパイヤを食べたい人たちが、SNS情報網による販路で、本校のパパイヤをこぞって購入したのです。

私は、卒業後は地元西条で農業生産法人に就職し、法人経営や耕作放棄地の利活用等を学びたいと考えています。西条市には大規模の農業生産法人も多数あり、大都市への出荷や加工にも力を入れています。農業生産法人であれば、私自身農業を学ぶだけでなく、私が将来法人化し、耕作放棄地を借り入れた農地を持たない農業をしたいという若者を雇うことができ、他の農業をしたい若者の就農を支援することも可能なのです。その若者たちに私の農業塾生がいれば、それが私の目指す理想でしょう!

休みの日には今と同じ、裏の畑で野菜との時間を過ごします。SNSでの発信、外国人パイヤーとの商談を経て、できた野菜はGAPシールを貼り、海外へ出荷されていきます。我が家のすぐ裏の畑、私の遊び場であった畑、昔部屋から見ていた小さな畑は、今は、色とりどり数多くの野菜で溢れています。この野菜たちが旅するのは、ヨーロッパ?台湾?アメリカ?それともオーストラリア?どの国の人たちに食べてもらえるのでしょうか?

日本の少量多品目小規模農家の未来像、西条の農業経営のモデルケースとして、小さな畑から始まった私の夢は世界へ羽ばたきます!私が日本の未来を支えます。



小さい頃からの大きな夢

南砺福野高等学校 農業環境科 2年 田中 駿也

我が家は富山県唯一のバラ生産農家です。年間13万本から15万本のバラを出荷しており、富山県内シェア6割を占めています。

私はバラを近くで見る事が好きで、幼少期からバラを育成するハウスや選花場へ通っていました。そして小学生の頃に、バラは花卉の色や形、香りなど魅力を多く持っている花であると気づきました。そんなバラを手にとられた方が笑顔になっているのを見て、私も自分の手で魅力的なバラを作り、お客様を笑顔にしたいという思いが生まれました。それが、幼少期からずっと変わらない私の夢です。

当時は、富山県、石川県、福井県の北陸三県でのバラ生産は特別なものではありませんでした。しかし、それは今ほど地球温暖化が進んでおらず、バラの育成しやすい気候であったからです。そのため今よりも低コストでの栽培が可能でした。しかし、地球温暖化が進み、バラ育成が盛んだった当時の北陸と比べ気候が不安定になってきており、夏季の気温上昇に対応するために冷暖房等を頻繁に使う必要が出てきました。育てるバラはお客様の手元に届くものです。だからこそ、品質を大切にしなければなりません。品質を保持するために、人工的に気温を調整することが必要となるなど、バラの生産は当時より難しくなりました。その結果、これまでバラを栽培してきた農家は違う作物へと移行し、北陸三県でのバラ農家が減少しました。我が家では、栽培環境が悪くなったとしても新しい品種を育ててみたいという祖父の意志が強く、父や私といった担い手がいることもあり、今までバラ栽培を続けてきました。そんな後ろ姿を見て、バラ農家を継ぐ気持ちが大きくなっていきました。

私が高校に進学するにあたり、将来の夢を父に相談した時、「バラは、栽培だけじゃない。もっと大きな課題を抱えているんだ。」と渋い顔をしました。バラ栽培は栽培環境の問題だけでなく、経営的な側面からも苦しい現状にあることを父から知らされました。近年、海外の赤道下の高原で育てられた安価なバラが輸入されるようになりました。こ

のような外国産のバラは日本で栽培されたバラより安定的に生産が可能です。バラの生育適温は23度から25度ですが、日本は四季があり、夏季には40度近い日が続くなど近年の日本の気候には合っていません。そのため、日本でバラを育てるには冷暖房の使用が欠かせずバラの単価が上がってしまい、外国産のバラに価格で負けてしまうのです。また、花卉市場で出回っている海外のバラの量の多さも日本のバラ農家を苦しめる要因でもあります。平成19年の市場に出回る切り花の60%は国内産のものでしたが、平成29年には切り花の60%が海外産のものへと逆転しました。その中の20%がバラであり、確実に大きな打撃を受けています。

日本のバラ生産の状況を知り、我が家の経営が心配になり、父に尋ねました。父は、海外で育てられた安価なバラとの競争に勝つには、大きく分けて2つの事に取り組んで行く必要があると教えてくれました。

1つ目は、バラそのものの品質を上げることです。価格の差が生まれてしまうことは仕方のないことなので、バラの品質を上げ、価格以上の品質のバラを作り上げることが競争に勝つための1つの戦略です。我が家のバラは、富山県主宰のバラの品評会で、一昨年には金賞(富山県農林漁業振興会長賞)を受賞し、昨年にも銅賞(株式会社富山中央花卉園芸社長賞)を受賞しました。この賞は、バラの品質の良さを示す証となります。この賞を取ることで、経営にプラスの要因になると考えます。

2つ目は、切り花だけを売るのではなく、付加価値を付けて販売することです。我が家では切り花の他、フラワーアレンジを行うなどして収益を上げています。また、母は毎月2回のフラワーアレンジメント教室を開いています。教室を開いて、お客様と花卉の話をしながらフラワーアレンジをすることにより、バラやその他の花卉の魅力などを知ってもらう機会を作ります。それとともに、継続的にこの教室を開いていくことで、バラが生活に身近なものになり、お客様と

のつながりを大切にできます。

父の考えを聞き、私もバラ生産や農業経営について学ぶ必要があると感じ、南砺福野高校農業環境科へ進学し、草花について深く学ぶ事を決めました。私の住む富山県小矢部市では、「ローズランドおやべ」が設立され、私たちを含めた四つの事業者が市内ブランドとして認定をうけ、街の景観づくりに尽力してきました。しかし、これまで協力して小矢部市を盛り上げてきた他の事業者の方でさえ、今はバラ栽培を諦めています。それでも私は自分が育てたバラを小矢部市内はもちろん、富山県内、さらには全国の方へ届けたいと考えています。私の夢は非常に厳しいものだと思いますが、それを実現するために何をすべきか、高校2年生なりに考えてみました。

その1、「市民・県民にもっと私たちのバラを知ってもらう」私たちのバラの存在は、身近な地域の方々や花卉市場の関係者の方々には知名度があるかもしれませんが、それ以外の方には、まだまだ知られていません。全国的に名前を知ってもらうためにはまずは富山県内で知名度や注目度を上げる必要があります。

その2、「市内ブランドから県内ブランドにランクアップする」市内ブランドは県内への流通がメインです。ですが、県内ブランドに認定してもらえれば県外への流通が今よりも容易になります。県内ブランドに認定してもらえよう、高

い品質と信頼、安全性、オリジナリティ、富山らしさ、市場性、将来性の7つの項目を達成できるよう、精進します。

その3、「新事業に取り組む」私が考える新事業は2つあります。1つ目は、食用バラの栽培です。食用バラの場合、特別な日に自分へのご褒美として購入したり、夫婦の記念日などに食卓に華を添えたりと、新たな用途を提案していきたいです。また、食用バラの加工品として、オリジナルのローズティーの販売も考えています。現在、バラを購入して頂いている方々は60歳以上の方がほとんどで、若い世代の方々にはあまり買っていただけていません。ローズティーであれば、若い世代の方にも気軽に買っていただけるのではないかと考えています。2つ目は、トレーラーハウスでの販売です。トレーラーハウスでのバラの販売は、私たちがお客様に直接商品を渡す事が出来る貴重な機会となります。その際にバラ一本一本が持つ魅力を伝え、直接お渡しする事が出来ます。お客様と会話をしながらお客様の要望に合った花と一緒に選び、笑顔で購入していただけるよう努めます。

私は将来、富山県の農業を引っ張っていくような存在になりたいと思っています。そのためにも何年、何十年とかけてでも全国販売を実現させます。そして、富山県に新たな風を吹き込み、富山県の農業を盛り上げていきたいと考えています。



農業から始まる地域創生

～農業の力で厚沢部町を元気に！～

北海道大野農業高等学校 園芸科 3年 外崎 裕樹

私の出身地である厚沢部町は、北海道道南地方にある人口4,000人ほどの小さな町です。「ジャガイモのメークイン栽培発祥の地」と呼ばれ、今でも「あっさぶメークイン」が町の農産物の主力です。私の実家も経営耕地面積約60haの、農作と畑作の複合経営を行っています。海に囲まれた半島であることによる冷涼な気候を活かし、甘みが強くしっとりした食感が自慢のメークインを生産しています。小さな頃から農業に励む両親の姿を見て育った私は、将来は兄と共に、6代目として、兄弟力を合わせて共同経営に取り組むことが目標です。

しかし、TPP11の発効等、昨今の日本の農業を取り巻く情勢は厳しく、私の故郷である厚沢部町でも農家戸数は年々減少の一途をたどっています。厚沢部町自体も、人口急減、高齢化が進み、町は賑わいを無くしています。SDGsの観点に基づき、農業を持続可能で発展的な産業とし、新たな地域創生を目指すためには、これまでと同じ経営ではなく、新たな部門への挑戦や最先端の農業技術の導入が必要です。

この厳しい状況の打破を目指し、私は、道南地方の農業高校の拠点である北海道大野農業高等学校に進学しました。大野農業高校では、畑作以外にも、畜産や花卉、野菜栽培等、様々な実習を体験しました。また、大野農業高校はSDGs宣言を行い、SDGsに基づいた持続可能で発展的な農業の実現を目指しています。そして大野農業高校の充実した農業学習の中で、私が最も心を引かれたのは、道内の農業高校では随一の規模を誇る果樹園での実習でした。

大野農業高校の果樹園の面積は約3ha、その中でリンゴ、ナシ、ブドウ、モモ、プルーン、クルミ等を栽培しています。そして一昨年度にはASIA GAPを取得し、食品安全・環境保全・労働安全を意識した、より良い農業生産を目指しています。この取り組みにより、地元のワイナリーである、はこだてワイン様との連携事業が開始され、大野農業高校産のブドウを原材料としたワインが昨春発売されました。発売開始からすぐに問い合わせが相次ぎ、2,000本用意されたワインが瞬間に完売したとき、私は驚きと共に、ブドウ栽培によるワイン製造に大きな可能

性を感じました。道南地方は、道内でも温暖で積雪が少ない等、ブドウ栽培の条件に恵まれています。またブドウ栽培は、南向きまたは南東向きの斜面が適しており、平野部が少なく中山間地の多い道南地方の農業にまさに適しています。そして生産者自ら醸造所、ワイナリーを手がけることにより、生産から加工、販売までを行う6次産業化を展開、そこからブドウ・ワイン製造を中心とした雇用が創出され、地域の活性化が期待できます。

私は目標が出来ました。将来は、現在の畑作中心の経営に、更にブドウをはじめとした果樹栽培を導入し、ワイン等の加工品製造や販売まで手がけ、6次産業化を推し進める、これが私の目標です。私の実家は畑作と稲作の複合経営を行っており、今春には株式会社となりましたが、更に果樹という新たな可能性のある部門を取り入れ、ワイナリー等の加工部門を創設し、更なる多角経営を目指します。また、テレビやラジオ、インターネット等の様々なメディアを活用して私たちの取り組みを広く全国に発信し、インターネット販売等も手がけていきます。そして新たな雇用を生み出し、私の生まれ育った厚沢部町に賑わいを取り戻します！だから私は現在、はこだてワイン様の工場に実習に行き、ワイン製造について学びを深めています。昨秋には、私たちが学校で生産したブドウを用いて、私たちの手で実際に仕込みを行いました。そのワインは今春、北斗市で発売され、再び大きな反響を呼んでいます。また、実家の経営を継いだ暁には、学校で学んだ知識を活かし、GAP認証を取得します。GAP認証は安心・安全な農産物の証明であり、今後、日本の農業が国際競争に打ち勝っていくためにも絶対必須の条件です。GAPを取得することにより、将来的には輸出も視野に入れた経営を目指します。

しかし、目標を叶えていく上で様々な課題があります。まず、SDGsに基づき農業を持続可能な産業にしていくためには、GAPの環境保全の観点が非常に重要です。現在の農業では農薬や化学肥料の多用による環境汚染が問題となっています。そこで私は今年、プロジェクト活動として、果樹の管理作業で産出される剪定枝や未熟果、落葉等の廃棄物の堆肥化

の研究に取り組みます。堆肥化にあたっては、同じく道南農業の主幹作物である稲作から排出される籾殻や米糠等を配合し、どの配合が最も良い堆肥になるのか研究を重ねます。そして出来た堆肥を施用することにより、化学肥料を用いない、地域循環型の環境保全型農業を目指します。また、道南農業試験場のご指導の下、リンゴの黒星病等の病害虫の学習に取り組み、耕種的防除を中心としたIPM(総合的病害虫管理)を目指します。

また、GAPの観点から労働安全を考える上で問題なのは、農作業の重労働性です。私は実家の手伝いにより、農業が大変な仕事であると知っています。果樹の実習でも、収穫物の入った1つ20kg以上もあるコンテナをいくつも運んだり、夏の暑い中、延々とナシの摘果をする等、若くて体力に自信のある高校生の私でも大変なことばかりでした。ブドウの収穫もすべて中腰での手作業です。これでは高齢化に伴い離農する人が増えても、若い人達から将来の職業として敬遠されても仕方がありません。しかし最近では農業分野でもICTの活用やAI、ロボット技術による自動化が進み、トラクタの自動運転やドローンによる農薬散布等、スマート農業が導入されてきています。果樹栽培の分野では長らく機械化が進まず、管理作業は人力がほとんどでしたが、最近では収穫専用ロボットやパワースーツが開発される等、農作業の自動化・省力化が始まっています。確かにロボットや機械の導入には初期投資がかかりま

すが、その後の人件費等は削減できます。また、作業を機械化・自動化することにより、高所作業等の危険な作業を回避できます。そして今後の人口減少社会では、労働力不足を補い、少ない人手で日本の農業を支えていくために、スマート農業は絶対に欠かせない技術です。

そして、これから私と共に農業を担っていく仲間を増やすために、私は今、大野農業高校の果樹園を舞台に、農業の魅力発信を行っています。地元の小学生を対象にした交流会では、クイズで楽しく果樹を紹介、そして果樹園を散策した後は、ブドウの収穫体験をします。実施後のアンケートでは、「今日はとても楽しかった!」「また来たい、大野農業高校で学びたい!」と多くの感想を頂きました。このほかにも、サクラソボの収穫体験会や収穫感謝祭、学校販売会等でも私たちの活動を発信しています。私たちの育てた生産物を購入していただいたり、栽培方法の質問やアドバイス、応援の声をもらったり等、私たちが励まされ、色々と勉強になります。取り組みは地道で先の長いものですが、これからの若い世代に少しでも農業に興味をもってもらい、将来、農業をやってみたい!という仲間を増やしていきます。

グローバル化が進む世界で、日本の農業は厳しい状況にあります。私は自分の夢を実現するために、日々自分で考え、挑戦し、私の故郷である厚沢部町から、持続可能で発展的な農業を実現していきます!



広がれ6次産業化 農業のイメージを変える第一歩

大阪府立園芸高等学校 フラワーファクトリ科 2年 ^{ライキ}園田 竜希

私は現代の多くの日本人が持っている農業のイメージを変えることにより農業を元気にしようと思います。

私は中学生までは農業に全く関心がありませんでした。大阪という土地柄、農業というものを身近に感じる事がなかったからです。しかし、普通科の高校に進学する気持ちは薄く、手を動かし、技術を身につけることができるような実業高校への進学を意識していました。私が進路選択で悩んでいた時、中学校の先生に農業高校を勧められたことで農業高校の存在を知り、学校見学に行くうちに農業に興味を持つようになり、入学を決めました。農業高校での生活が始まり、せっかく農業高校に入学したのだから農業関係のクラブに入りたいと思い、複数の農業関係のクラブを見学しました。その時に特に強く印象に残ったのは「果樹部」でした。果樹部では新たな取り組みとして廃棄される果実や野菜を利用した商品開発を計画していました。その日から果樹部の一員として計画に巻き込まれ、農業の様々な課題と可能性を知ることになったのです。

本校は大阪府立高校で最も広い土地を所有し、野菜や果樹など多くの品目を栽培しているのですが、少しの傷や形が悪いといった理由で販売されず、廃棄される農作物が多く発生することを知りました。特に果実はすぐに傷んでしまうため、規格外品はすぐに廃棄します。私は果樹部員の活動としてそのような規格外農作物の非可食部を取り除き、真空凍結保存をするといった加工をひたすら行いました。大型の冷凍庫がすぐにいっぱいになり、加工する部員の数も足りません。農業ではおいしい農作物が生産されるその裏でそれだけ多くの農作物が廃棄されていることを身をもって知りました。

これらの規格外農作物を使った商品としてはソースが第一候補に挙がりました。大阪はたこ焼きやお好み焼き、串カツなどソースが身近な食文化であり、さらに原材料に様々な野菜、果実を活用できることから今回のプロジェクトにピッタリだと思いました。部員たちで市販されているソースを試食

したり、どのような味のソースを目指すかの会議を開き、そこで出たアイデアをソース会社に持っていきました。ソース会社での会議の結果、ワインのようにその年によって使用する果実の割合が変わり、その年の一期一会の味を楽しむというコンセプトでのソース製造を目指すことになりました。その年によって廃棄する果実の割合などは変動するため、その年ごとに味が変わってもいいのではないかと社長の発言を受けて、不安定さを逆に魅力とする新たなアイデアをコンセプトの軸としました。また私たちはせっかく様々な果実、野菜を使うのだから素材の味を前面に出したソースももうひとつのコンセプトとしました。市販されている多くのソースではスパイスの風味が強く、生の野菜や果実の風味が弱く感じました。調べてみると、野菜や果実が15%以上含まれているソースを中濃ソース、20%以上含まれているソースを濃厚ソースと定義されています。そこで私たちは野菜、果実30%~50%の含有量のソースを目指すことにしました。

1年間の規格外農産物の加工によりウンシュウミカン、ニホンナシ、セイヨウナシ、イチジク、トマト、タマネギ、ピワ、モモ、ウメなど計194.4kgの果肉原料が準備できました。これらをもとにした試作品も完成し、市販品との比較のためにアンケートや味覚センサーによる味の数値化により味の差別化を図り、園芸高校独自の味を追求したいです。初めての試みのため、まずは最小ロットの300L(約1000本)から製造し、これから新たな商品の開発や規模拡大を計画中です。

この活動を通して私は6次産業化という新たな産業の可能性を知りました。6次産業とは農業や水産業の1次産業がそれらを加工する2次産業、さらに流通や販売をする3次産業にも業務展開した経営形態です。農業は農作物を作ったらそのままの状態の販売するイメージが強かったのですが、6次産業化を知り、私の農業のイメージが変わり、農業の可能性についてもっと知りたいと思えるようになりました。しかし、調べるほど日本の農業の大きな課題を知ることになりました。

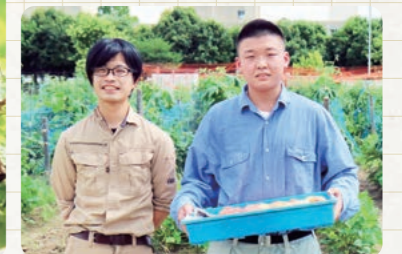
まず1つ目の大きな課題は農業従事者の減少です。農林水産省の情報によると2000年には農業従事者数が389万人だったのに対し、2019年には168万人と、ここ20年近くで日本の農業従事者数は約半減しています。この減少の大きな原因は若い農業従事者数の減少です。そして若者が就農しない理由として、農業は自然を相手にした産業であり、天候や災害による影響を受けやすく、収入が不安定であること、農業に儲からないというイメージがついてしまっているためだと考えます。新たに農業に参入する若者が少なく、現在の農業従事者も高齢化が進み、農業の衰退が止まりません。

2つ目の課題は規格外農産物についてです。私は農業高校で初めて農業に触れ実際に破棄される農産物を目にして「もったいない」と思っていました。農林水産省のデータでは日本では規格外農産物の廃棄量は年間約200万トンであり、総生産量の約20%が破棄されています。日本全体でみると想像もつかない量の規格外農作物が廃棄されており、この20%の廃棄物を利用できればと思うようになりました。

そして、これらの問題を解決するためには、まず儲かる農業を目指し、「農業」という産業のイメージを変えることが必要だと考えます。そのために私が提案するのが6次産業化です。農業をしていたらどれだけ気を付けても規格外品が発生します。それら規格外品を農家から買い取り、ソースに

することにより、廃棄農産物の減少と未利用資源の活用による新たな価値と収入を生み出すことができるのではと考えます。例えば地域ごとに6次産業化のための工場を設置し、農家から規格外農産物の買い取り、加工を行い、ソースの製造をします。地域によって栽培している野菜や果樹は異なるため、その地域ごとに特色のあるソースができます。ソースだと様々な農作物を原料とできるため、原材料の量も確保しやすく、商品化もしやすいはず。また、材料は本来廃棄するはずだった農作物であり、それらを買収することで、農家の収入向上につながります。つまり規格外農産物の廃棄量の削減と農家の収入向上の両立ができるのではと考えています。さらにそれは農業のイメージを変えることにもつながるのではと思います。

私は農業高校で1年間を過ごし、これからの農業について体験的に考える機会を持つことができました。そしてこれからの農業を支えていきたいという想いをもつようになりました。将来は農業に携わり、農業と他の産業を結び付け、新たな価値を生み出すような活動で日本の農業に貢献したいと考えています。私ひとりの力は非常に微力ですが、農業という枠を超えて周りを巻き込むことで新たな価値やシステムが生まれるのではないかと感じています。私はそのために大学へ進学し、農業に関する知識や技術、経営について学びたいです。



どうして生まれ、どのように仕上げたのか？

私はこうしてレポートを完成させた。



愛媛県立西条農業高等学校
食農科学科 3年

徳永 都士

「日本の少量多品目小規模農家の未来像
～高校生農家の物語
『裏の畑から世界へ』～」

セディア財団賞 最優秀賞

テーマは自分の中から見つけよう。

コンテストへの参加は先生に勧められたからです。これまでの作品集を読むと、みなさん真剣に農業の未来を考えていらっしゃる。挑戦する価値があると思いました。作成には、私がこれまで自宅で行っていた栽培や販売の経験をベースに、販路を拓くにはGAPの実践による安全安心の確約とSNSの利用が鍵という持論をプラスしてまとめました。やはり借物の意見や考えでは人を惹きつけるレポートにはなりにくいと思います。自分の経験談や将来の夢など、自分の中からテーマを見つけて、広げていけば説得力のある、強いレポートになると今回、実感しました。

文章があまり得意ではないので、何度もくじけそうになりましたが、その度に先生に激励していただき、自分の思いや夢を知ってほしいということ、私のレポートを読んだ高校生や農家がなにかの気づきを得て、それを将来に活かしてもらえることをモチベーションに仕上げました。言いたいことはあるけどどう書けば理解していただけるレポートになるのか、その点は先生にどんどん相談した方がいいと思います。



富山県立南砺福野高等学校
農業環境科 2年

田中 俊也

「小さい頃からの大きな夢」

セディア財団賞 金賞

構成と文章表現にはこだわりたい。

コンテストのことは先生から教えていただきました。個人的にも富山県のバラの素晴らしさを広く伝えたくかったので挑戦することにしました。制作期間は3ヵ月くらい。内容はすぐに固まったのですが、最後まで苦労したのは文章の表現です。先生に何度も確認していただき、国語の先生のアドバイスもいただきました。先生方とチームを組んで、いっしょに挑んだという感じがしています。先生方には本当に感謝しています。

何を書くかも重要ですが、どのように書くかも大切。応募した後も、まだまだ練り上げる余地はあると思っていますが、これから挑戦する方は、表現にも注意を払うとさらにいいレポートになると思います。

何事もモチベーションは大切だと思います。今回、僕がレポートへ挑戦したのは富山のバラのことを多くの人に伝えたいからです。現在は海外からのバラに押されていますが、日本で育てたバラは香りも品質もとても素晴らしいです。その思いが伝わったとしたらこんなうれしいことはありません。

セディア財団賞 金賞

先生の協力はどんどん仰ぐべき。

学校の意見発表会の後に先生に勧められました。我が家は代々農家で、僕で6代目になります。親が法人企業を立ち上げたので僕もその後を継ぐつもりですが、個人的には果樹栽培にも挑戦したいと思っています。その上で地元の活性化につながる事業に広げていくのが夢です。賞とかは気にせずに、自分のそんな想いを素直に書こうとしたことが良かったのかもしれない。書いていると知らないことがいろいろ出てきます。書くことは学ぶことになり、自分の将来を真剣に考えることだとわかりました。その気づきが一番のモチベーションになりました。

ただ、このようなコンテストへ応募したことは初めての経験。これから挑戦される人たちも初めての方が大半だと思います。一人で抱え込まずにどんどん先生に協力を仰いだ方がいいと思います。当たり前のことですが、僕よりも先生の方が知識は豊富ですからなるほどという意見をいろいろいただきました。迷ったときはどんどん先生を巻き込む(笑)。レポートの世界が広がっていきます。



北海道大野農業高等学校
園芸科 3年

外崎 裕樹

「農業から始まる地域創生
～農業の力で厚沢部町を元気に!～」

セディア財団賞 金賞

この経験は将来の提案書づくりに役立つ。

僕は農業とはまったく無縁の環境で育ちました。農業高校へ進学して初めて規格外農作物プロジェクトのことを知り、規格外として廃棄される農作物を利用したビジネスができれば農家さんのこれからの貢献できると思い、その活動を真剣に学ぶようになりました。

農業コンテストへの応募は僕に書けるかという不安もありましたが、僕が夢中になっている規格外農作物プロジェクトは意義ある素晴らしい活動だと思っているので、そのことを素直に書こうと決めました。作成にあたっては農業コンテストのこれまでの作品を読んで参考にしました。先生には何度も確認していただきました。先生と二人三脚で書き上げたと思っています。

僕は大学へ行っても規格外農作物について学び、卒業後はその事業を立ち上げたいと考えています。レポートの作成は難しいところもありましたが、この経験は社会人になってからの新規ビジネスの提案書づくりにも役立つと思うとやる気ができました。将来のためだと得意なことでもやる気が湧いてくると思います。



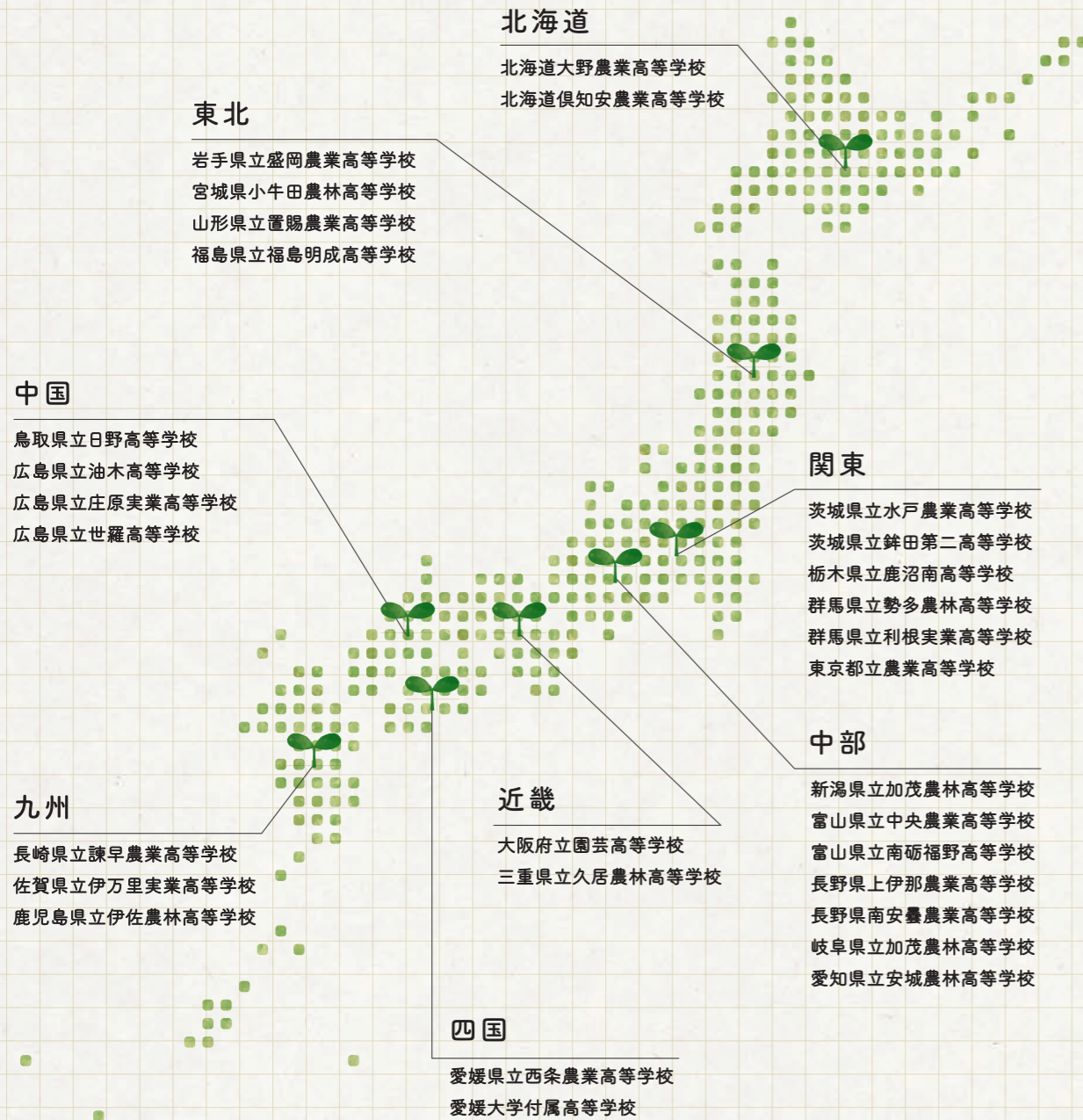
大阪府立園芸高等学校
フラワーファクトリ科 2年

園田 竜希

「広がれ6次産業化
農業のイメージを変える第一歩」

〈応募高校一覧〉

多数のご応募ありがとうございました。



公益財団法人セディア財団主催



アグリ
マイスター
顕彰制度
認定

第6回 | 高校生が描く

明日の農業コンテスト

わたしたちが暮らす上で欠かすことのできない「農業」は、どうすれば持続可能で発展的な産業になるのか。
農業高校に通う生徒の皆さまの、日々の学びの中から「自分ならこうする!」と考えた
農業に関するあらゆるアイデアをまとめたレポートを提出してください。



対象となる生徒

全国の農業高校に通う1・2年生
セディア財団賞(最優秀賞・金賞)受賞者は
最先端農業を学ぶ旅へご招待!!

過去には、施設園芸先進国のオランダへの見学研修旅行を実施!!
セディア財団の農業コンテストに応募して、
最先端農業を体験してみませんか?

※新型コロナウイルス感染状況によって副賞内容が変更になる可能性があります。

募集内容

「わたしはこんな方法で農業を元気にする」をテーマにした個人のレポート。原稿用紙8枚以内(2,000~3,000字程度)。パソコン・ワープロからの印刷可。日本語で執筆された自作の未発表作品に限り。レポートテーマ例は、①収量を増やす為には②多品種化でリスクを減らす③新たな出荷調整法④生産性の向上と施設園芸の活用⑤これからの販路開拓に向けたアイデア⑥IoTを駆使した次世代農業に向けたアイデア など。

募集期間

2022年 **4/15**(金)

アグリマイスター顕彰制度
について。

当コンテストは、B区分に分類され、【金賞 12点】【銀賞 7点】【銅賞 4点】が
得られます。アグリマイスター顕彰制度
については、全国農業高等学校長会
ホームページをご覧ください。

<http://www.zennokocyokai.org/agui/>

詳しい
応募要項はこちら ▶



第6回 作品募集ぜひ、ご応募ください!